

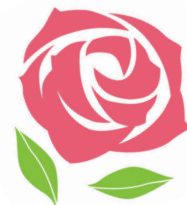
アートとケアが 出会う視点と拠点づくり ワークショップ 「人とつながり、アート&ケアに出会う」の可能性



正保正恵・渋谷清・池田明子・古山典子・
山内加奈子・宮前良平・大谷悠

本研究の目的

1. 広島県福山市内の子育て世代包括支援センター（日本版ネウボラ）と連携しながら**大学独自の拠点を**作ることをめざして、**アートを通じた安心・安全を感じる学びをプログラム化し、個人や社会にもたらず変化を**評価していく足がかりを作ること
2. （メタ的な目的）**新しいタイプの大学発の子育て・親育て拠点の在り方**を問う



背景① 過去からの研究のプロセスと展開

2017年度

「ネウボラ(継続的子育て支援)の日本的展開の可能性」

2018年度

「子育て世代包括支援センター(日本版ネウボラ)活性化の課題と大学の役割」

2019年度

「子育て世代包括支援センター(日本版ネウボラ)における多職種連携と研修のあり方について」

2020年度

「子育て世代包括支援センター(日本版ネウボラ)におけるオンライン相談の可能性と予防的教育について」

2021年度

「子育て世代包括支援センター(日本版ネウボラ)との連携による予防的教育について」

2022年度

子育て世代包括支援センター(日本版ネウボラ)との連携によるアートを取り入れた予防的教育—通常/要支援妊婦等を対象として—

2023年度

子育て世代包括支援センターとの連携による大学発アートを取り入れた予防的教育

2024年度

アートとケアが出会う視点と拠点づくり

背景②

2021年度の活動によるHP

子育て支援研究会

ホーム 掲載動画 お役立ち情報 お知らせ お問い合わせ

福山市立大学

妊娠期からの子育て支援研究会

研究会の概要

この研究会は福山市立大学教育学部の教員が中心となり、福山市ネウボラ推進課と連携しながら妊娠前から出産後の親子を応援するために立ち上げたものです。この研究会では、妊娠中から子育て中のお母さんやパートナー、そしてそのご家族に対する支援に関する研究を進めており、ワークショップを実施中です。ここでは、その様子を動画で配信しています。

研究会メンバー紹介

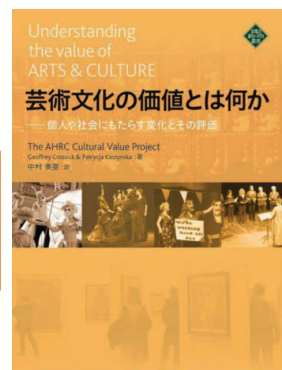
正保 正恵 (しょうほまさえ)
研究代表者
福山市立大学教育学部 教授
専門：家庭科教育・家庭生活教育



本ワークショップの目的

実践の下敷き

Geoffrey Crossick , Patrycja Kaszynska※(2022)



Art & Care に関心を持つ教員がそれぞれの専門を生かしながら、**一般の方も対象にして**連続講座を開いた

大学と地域の行政が連携した異分野グループによるパイロット的ワークショップの参加者に The AHRC Cultural Value Project の研究成果に基づく「**個人の内省**」, 「**アイデンティティ**」, 「**主観的幸福感**」などの項目について感想を求めた

※ Geoffrey Crossick , Patrycja Kaszynska (2022)芸術文化の価値とは何か 個人や社会にもたらす変化とその評価, 水曜社

問題背景のキーワード

異分野

家庭科教育学, 美術教育学, 音楽教育学, 臨床心理学, 発達心理学, 幼児教育学, 都市研究, 社会心理学

AMC by 異分野

英政府機関The AHRC Cultural Value Project の研究成果に基づく個人の内省, アイデンティティ, 主観的幸福感等についての効果を検討

連続ワークショップシリーズ 1

人とつながり アート&ケアに出会う

2024年9月28日(土)・10月5日(土)・10月19日(土)
@ 福山市立大学 xxxxx

昨年、「これからの子育てに安心・安全を感じるためのアートを活かしたワークショップ」を一般の方にも参加していただくこととバージョンアップした企画で中の方、アート&ケア、子育ての方々と、アート&ケアに関心を持ってご参加ください。

交通アクセス



中国バス：「手城入口」下車 徒歩2分
中心部循環路線まわろーず：「リーデンローズ入口」下車 徒歩10分
来学者駐車場：大学から市道福山池山沖野上線を挟んで東側
※駐車スペースには限りがあります。なるべく公共交通機関をご利用ください

日時	講座名	内容	参加費	定員	講師
9月28日(土)	I 講座全体の説明	芸術文化の価値とケアについて、「芸術文化の価値とは何か」を引用しつつ、今回の講座で何を学ばせていただくか、説明を行い、半構造化アンケートをお願いしたい。	無料		
	II 自転車発電で電気をつくろう	自分だけのオリジナルの照明をつくり、自転車発電で光らせてみます。音階何音なく利用している電気やエネルギーについて、体験しながら楽しく学んでみませんか？ ※作ったランプはお持ち帰りいただけます	1,500円/組	10組程度 (組一人7名程度)	大谷 悠 (福山市立大学 都市経営学部 講師) 空き家・空き地を生かしたまちづくりについて、日欧の実際の現場で活動しつつ都市研究を行っている。
	III 音楽づくりを気軽に楽しもう	無作為に発せられる音に合わせて意図的に音を重ね、「音楽」をつくっていきます。楽器通りに取ったり、鍵盤楽器を演奏したりする能力は不要で、誰でも参加できます。「正解」も「失敗」もない音楽づくりを楽しみましょう。 ※自分の音楽を録音してお持ち帰りいただけます	無料	10組程度 (組一人7名程度)	古山 典子 (福山市立大学 教育学部 教授) 音楽教育、音楽科教育。共著に「おんがくのしくみ」(教育芸術社)、「音楽を学ぶということ」(同)など。
10月5日(土)	I 絵本の世界を愉しもう	絵本は読む人(子ども・大人)によって様々な楽しみ方があります。絵本の世界にゆったりと寄り、参加者の皆さんと語り合いながら、絵本の世界を楽しみ、明日からの日常を心豊かに過ごす喜びを共有していませんか？ ※お気に入りの絵本を1冊持参してください	無料	10名程度	池田 明子 (福山市立大学 教育学部 教授) 保育学。幼稚園教諭として長く保育現場に勤務し、子どもと共に絵本の世界を楽しんできた。
	II 背守刺繍で想いを伝えよう	背守刺繍とは、江戸時代から伝わる、背中に(縫い)目を作ることで産物から子どもの命を守るために考案された「おまじない」。VUCAの時代を生きる私たちも、刺繍に託して安心を自分と誰かに届けてみよう。	無料	10名程度	正保 正恵 (福山市立大学 教育学部 教授) 家庭生活教育、家庭科教育。共著に「家庭生活の支援—理論と実践—」(建帛社)、「助産ケアの基本」(日経研)など。
	III 何気ない日常を想起しよう	「日常記憶地図」(サトウアヤコ)という手法を用いて、参加者のみなさんの懐かしい日々のささやかな記憶を想起します。自分の記憶に身を委ね、他者の記憶と思いがけず重なり合う空間を楽しみましょう。	880円/人	10名程度	宮前 良平 (福山市立大学 都市経営学部 講師) 社会心理学。被災した写真の洗浄・返却活動を通じて、記憶や想起が人生に与える意味について研究している。
10月19日(土)	I 絵でコミュニケーションしよう	絵は絵心や美的センスを気にする人もいますが、ここでは不問です。絵によるコミュニケーションという非日常的な体験を味わう中で、自身や他者の価値観を知り相互理解を深めることを目的としたプログラムを実施します。 ※絵でもよい(複製等)を写しつけてお持ちください(ない場合は不問)	無料		山内 加奈子 (福山市立大学 教育学部 講師) 臨床心理学。子どもから高齢者まで幅広い年齢層の人を対象に科学の視点からこころを考えてきた。
	II みんなで楽しむ造形遊び	この造形ワークショップでは、身体を動かしながら共同して材料を並べたり、つなげたり、重ねたりする造形遊びの活動を通じて、みんなで創り出していく喜びを共有体験します。	無料	10組程度 (組一人7名程度)	渋谷 漢 (福山市立大学 教育学部 教授) 美術教育。「造形あそび」の要素を取り入れた表現教育をワークショップや公開講座等で実践展開している。
	III 振り返って	講座から学べたこと・変わったこと・これから動き出したいことを語り合っして、もしかしたら、共同で来そうなことを考える。	無料		

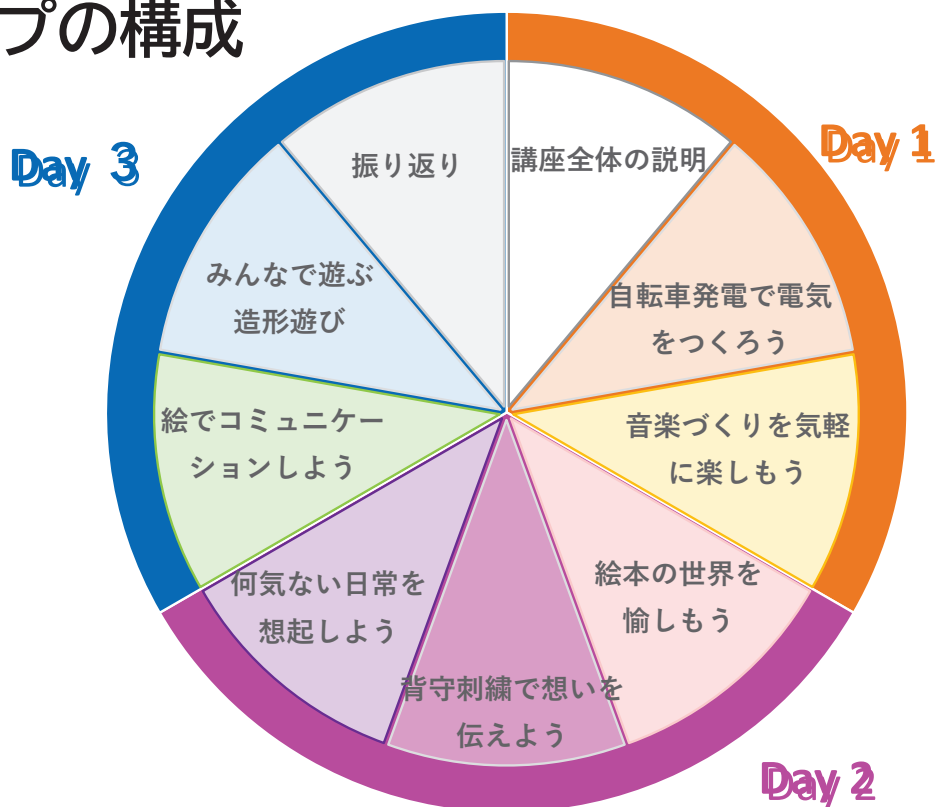
I [10:00-11:30] II [12:30-14:30] III [14:40-16:40]

お申込・詳細：
右の QR コード、または下記 URL から
<https://forms.office.com/r/XJdtzxqQIK>

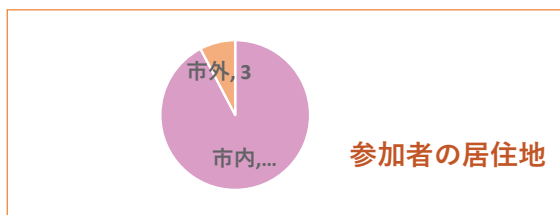
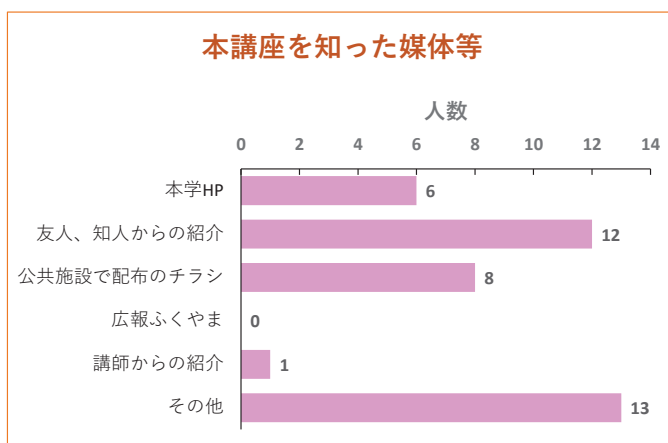
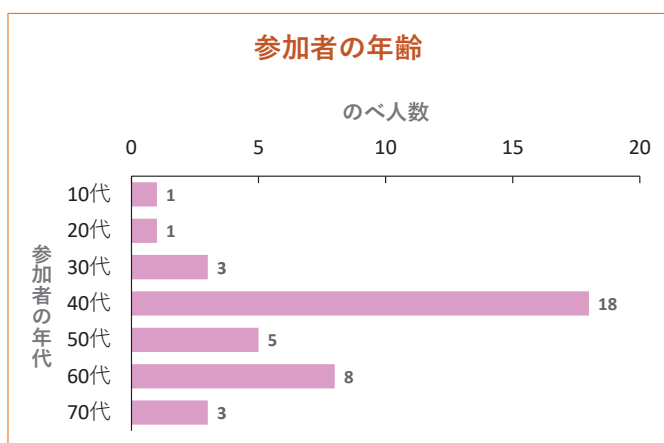


※本ワークショップは研究の一環でもあるため、アンケートやインタビューのご協力をお願いすることがございます。個人が特定されることがないように配慮しています。

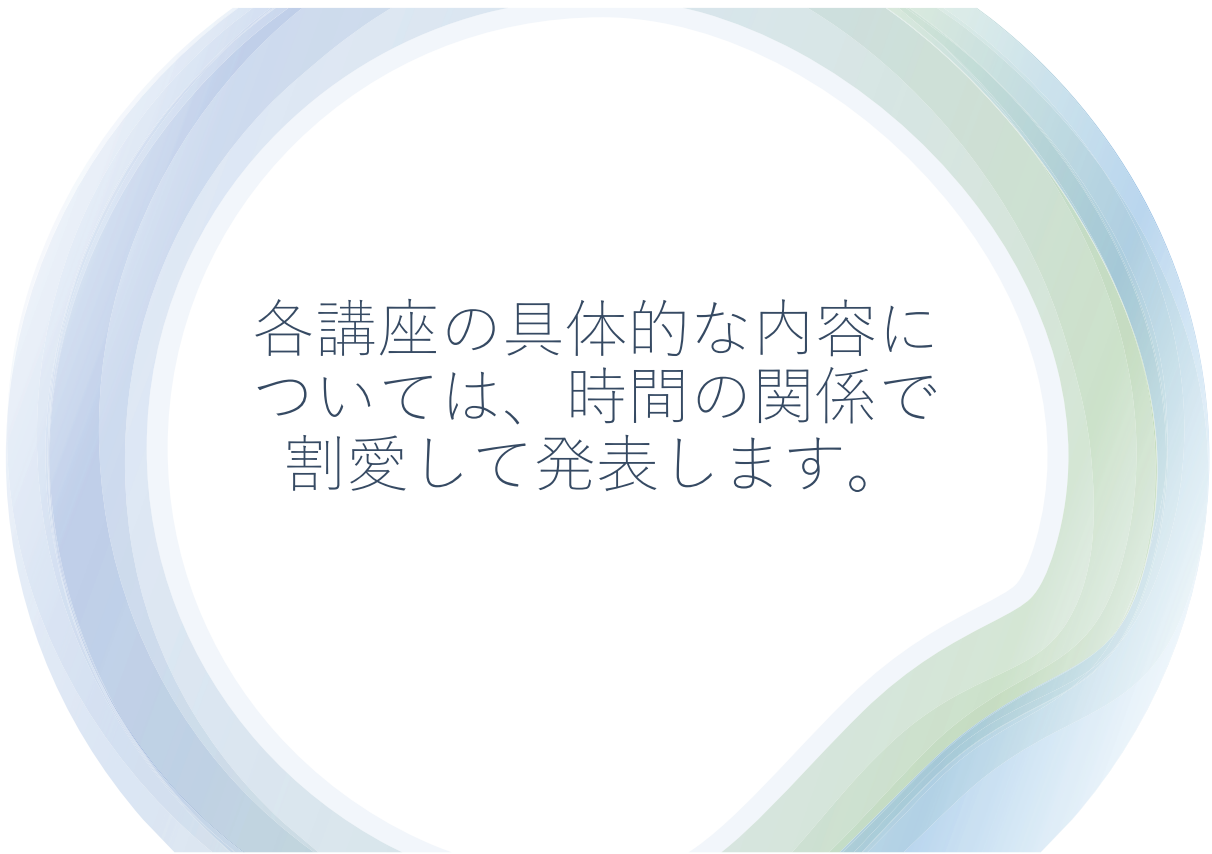
ワークショップの構成



参加者について



- ・参加者の年代は10～70代まで幅広く、40代が最多であった
- ・本講座を知ったのは、友人、知人からの紹介、公共施設で配布のチラシ、本学のHPであり、様々な広告媒体を利用していた
- ・市外からの参加もあった



各講座の具体的な内容については、時間の関係で割愛して発表します。

自転車発電で電気をつくろう

大谷 悠

(専門：都市研究・空き家空き地を活かしたまちづくり)

ワークショップ（WS）の概要

テーマ「自転車発電で電気を作ろう」

- ・2024年9月28日(土)実施
- ・所要時間:2時間
- ・募集した参加者:10組程度
- ・実際の参加者:8歳～60代の10名

【準備した物】

自転車、ランプシェードを作成するための木、紙、文具、電球など

WSのプログラム

1. オリジナルのランプシェードを作る。
 - ・木の土台とランプを繋げる
 - ・シェードを厚紙で作成し、絵をかいたりちぎり絵などで装飾を行う。
2. 自転発電を動かし、ランプを灯した。
3. こだわりのデザインとストーリーをもったランプを作ることで自らの世界観を表現する。



WSの様子



参加者の感想

- 普段、何気なく使っている電気だけど、自転車発電で思っていたよりパワーが必要でエネルギーが感覚で体験できた。
- 参加者同士で証明のデザイン用の紙を共有して光らせたときも一体感があり、とても良かった。
- 初めて出会った人とモノづくりをするのが興味深い体験だった。他者の完成や表現に刺激を受けた。
- 1つの作品が作れた満足感。
- 灯りの持つ力を感じた。

音楽づくりを気軽に楽しもう

古山 典子

(専門：音楽教育、音楽科教育)

古山

ワークショップ (WS) の概要

テーマ「音楽づくりを気軽に楽しもう」

- ・2024年9月28日(土)実施
- ・所要時間:2時間
- ・募集した参加者:上限10組 音楽経験は不問 年齢制限なし
- ・実際の参加者:8歳~60代の10名

【準備した物】

煙突ブラシを使った音具2台、サウンドブロック (派生音含む、2オクターブ分)
ミニグロッケン2台、オルフ楽器 (木琴) 2台、HAPIドラム2種類、各種マレット、
図形楽譜用の用紙と筆記用具

WSのプログラム

1. 他者とともに音楽をつくる—わたしたちの《雨の樹》をつくろう

- ・準備した楽器の中から、自分のお気に入りの音を2つ以上見つける
- ・お気に入りの音で音回し(響きを楽しむ)
- ・参考楽曲として、武満徹《雨の樹》を聴いてみる
- ・「雨」をテーマとして雨の降る様子をイメージし、言葉ではなく
他者の音を感じ取りながら自分が選んだ音を重ねて行く

2. 音を鳴らす仕掛け(煙突ブラシ音具)の紹介

- ・自転車発電の電気を使って音を鳴らす装置の紹介

3. 自分の音楽をつくる—わたしの《雨の樹》をつくろう

- ・曲のテーマを決める(「雨」にちなんだテーマ)
- ・音を鳴らしながら音のつながり方、重ね方を図形楽譜に描く
- ・無作為に鳴る音(煙突ブラシ音具)に、作為的に音を重ねて音楽をつくる
- ・発表(演奏表現→作品のテーマと図形楽譜)

【ポイントとなったことがら】

- ・武満徹《雨の樹》の鑑賞
- ・合わせなければならない音：
古山が自作した煙突ブラシ音具
- ・図形楽譜の利用

WSのプログラム

1. 他者とともに音楽をつくる—わたしたちの《雨の樹》をつくろう

- ・準備した楽器の中から、自分のお気に入りの音を2つ以上見つける
- ・お気に入りの音で音回し(響きを楽しむ)
- ・参考楽曲として、武満徹《雨の樹》を聴いてみる
- ・「雨」をテーマとして雨の降る様子をイメージし、言葉ではなく
他者の音を感じ取りながら自分が選んだ音を重ねて行く

2. 音を鳴らす仕掛け(煙突ブラシ音具)の紹介

- ・自転車発電の電気を使って音を鳴らす装置の紹介

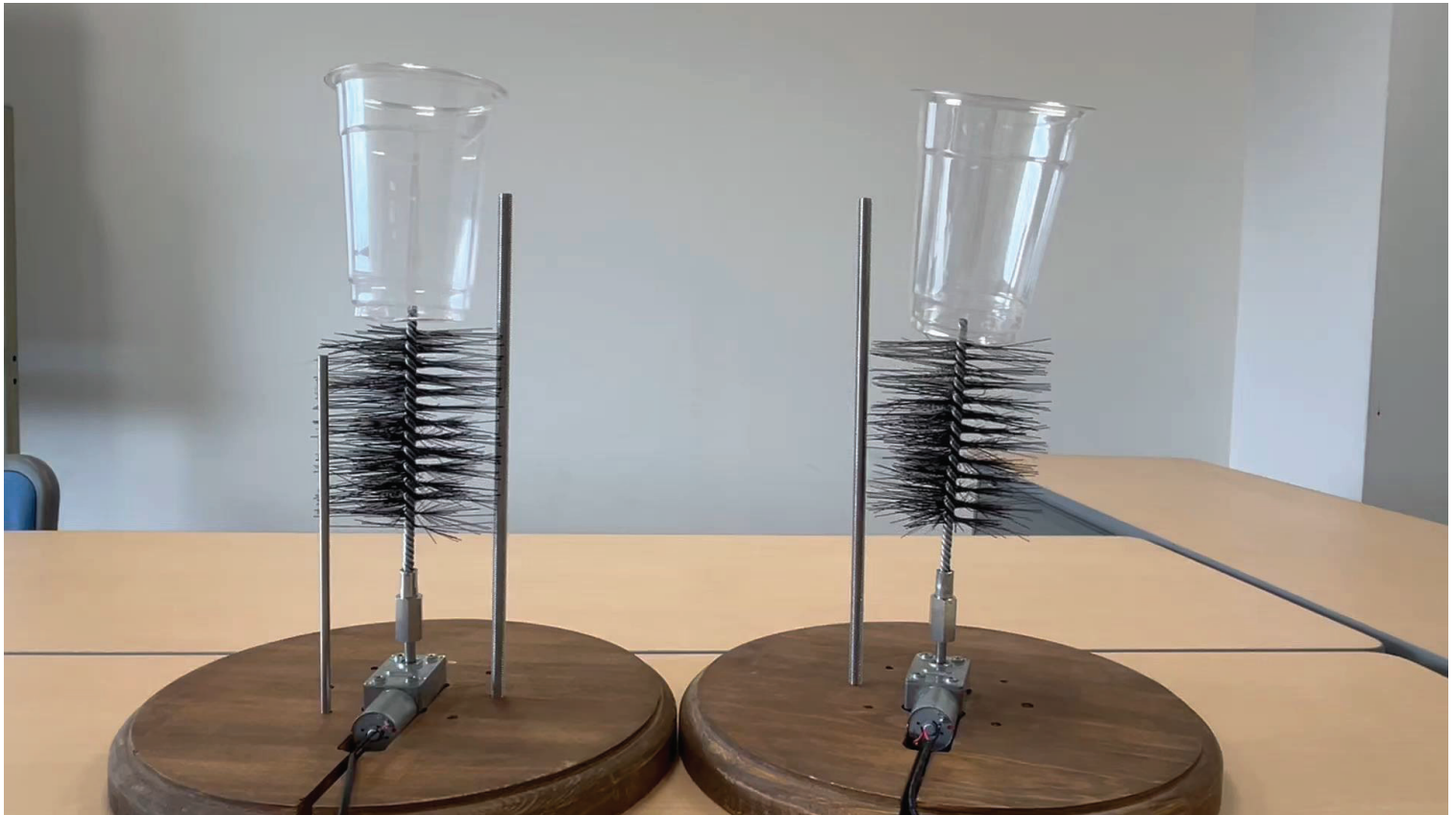
3. 自分の音楽をつくる—わたしの《雨の樹》をつくろう

- ・曲のテーマを決める(「雨」にちなんだテーマ)
- ・音を鳴らしながら音のつながり方、重ね方を図形楽譜に描く
- ・無作為に鳴る音(煙突ブラシ音具)に、作為的に音を重ねて音楽をつくる
- ・発表(演奏表現→作品のテーマと図形楽譜)

意図的に鳴らした音に、
他者が音を合わせ/重ねていく
⇒協働的な音楽創作

無作為的な音に、
意図的に音を組み合わせる
⇒個別的な音楽創作

参加者数が10名程度の同室での活動→緩やかに他者と
つながり、影響し合いながら自分の活動が成立

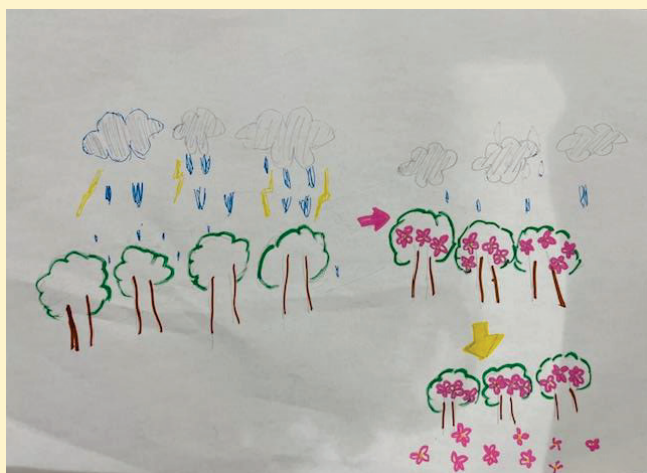


古山

WSでの仕掛け（環境設定）

- 言葉を使わず、音でイメージを表現し、共有するための活動を導入（前半）で展開。
→見知らぬ他者とのつながり形成のための集団活動→集団と個の経験の往還
- テーマは「雨」と設定。
設定の理由：年齢を問わず誰もが経験しており、多様なイメージが可能
→「雨」をモチーフにしたテーマについては、降り方やどこで降るか（森の中か都会に降る雨か等）、どのような感情の中で雨を捉えるか、などが手掛かりになることを言及した。
- 参考楽曲として武満徹《雨の樹》を鑑賞。
→創る楽曲のイメージとして提示（明らかな「正解」や「間違い」がないことを示すことを意図）
- 直前のWSとの関連を感じさせる装置を提示し、ランダムに音が鳴り、完全にはコントロールできない無作為的な音に組み合わせる形で創作するよう求めた。
→音具はブラシの回転速度が異なる2種類を準備し、どちらかを選べるようにした。両方使用も可。
- 図形楽譜をイメージを固定し、音の試行錯誤する手がかりとして利用。
→図形楽譜を描く時に、音を出しながら取組むことを求めた。

音楽作品 + 図形楽譜例



8歳の参加者



持って帰りたい！



60代の参加者



音が出る装置（煙突ブラシ音具）の意味

【参加者の発言】

「自然の音って不規則だと思うんですけど、煙突ブラシの音もまさに不規則。実際に聴く間まで（音具の音が）想像できなくて。おもしろくて濃い時間」

「音を生で聴きながら音を合わせるのが楽しかった」

「合わせてやるということで課題の難易度が上がったて難しい気がしたけれど、演奏するとパートナーというか、一緒に音を合わせてやることが楽しいなと感じたのでよかった」



自分で完全にはコントロールできない音がベースとしてあることによって、
創意工夫が生まれている様子がうかがえた



煙突ブラシ音具が、音楽創作における「制約」（手がかり）となった
音具の音を基準として、自分の音を重ねることで
工夫しやすくなった可能性が見出せる

創作過程で図形楽譜を描いたことの意味

【参加者の姿から】

- ・音による試行錯誤過程で図形楽譜の作成を取り入れたことで、思考（吟味）が可能になっている様子が見られた。→**試行錯誤の手掛かりとなった**
- ・音楽作品の設計図として機能：図形楽譜を指でなぞりながら表現する参加者も見られた。→**音楽作品に物語が生成された**



発表時の表現にたっぷり時間をかけた参加者が多く、
自分の作品のイメージに入り込んで表現している姿が見られた



図形楽譜という別の表現媒体との組み合わせによって、
音楽創作そのものが深まった可能性

参加者の感想（事後アンケート回収数8、うち1は自由記述なし）

40代	音楽のワークショップに参加するのははじめてで、私にできるかなあと戸惑ったが、とても自由で、意外なほど楽しく音作りができた。 ほかの参加者の方の感じ方もそれぞれ違って、聞くのがすごく楽しかった。とても刺激的だった。 音を作る、演奏する楽しさを実感した。装置がすごかった。
60代	頭の中の音を形にしていく、おもしろい時間でした
40代	テーマを考え、図で表現するのは今までにない作業で、使ったことのない脳の回路を刺激されたような感覚になりました。 今回照明作りで集中力が切れてしまった娘でしたが、またこのような機会があれば参加します。
60代	楽器ではない音に合わせて音楽づくり...ということは、全く形のないもの、今まで作られていないものに取組むので、 とても自由で、上手にやらなきゃという思いが浮かばない、とても没頭できる時間 でした。
30代	It was a very nice and calm atmosphere to try something new!
60代	少し難しく、イメージだけで作成してしまった気がします
40代	正解のない音楽を作る作業や使ったことのない楽器を使えて楽しかったです。 作曲の概念が変わり、楽しかったです。

絵本の世界を愉しもう

池田 明子
(専門：保育学)

WSの概要

池田

テーマ「絵本の世界を楽しもう」

実施日:2024年10月5日(土)

所要時間:1.5時間

募集した参加者:10名程度

実際の参加者:大人9名 こども2名

準備した物：絵本2冊

実施者の狙い：絵本の世界にゆったりと浸ってみることで、あるいは参加者の皆さんと語り合うことで、自分の感じ方を大切にしたらいいんだなということを感じ何気ない日常を心豊かに過ごすことの大切さに気付く

WSの様子

池田



参加者の感想

池田

- ・ 絵本の読み聞かせに関心があり、参加しました。初めて知る絵本もあったり、みなさんの紹介があったり、絵本について考えを深めることができ良かった。
- ・ 色々なジャンルの絵本に触れることができ愉しめた。
- ・ 忘れていたことを思い出した。

背守刺繍で想いを伝えよう

正保 正恵

(専門：家族生活教育、家庭科教育)

WSの概要

正保

テーマ「背守刺繍で想いを伝えよう」

実施日:2024年10月5日(土)

所要時間:2時間

募集した参加者:10名程度

実際の参加者:10名

準備した物：刺繍用布、糸、刺繍枠など

実施者の狙い：背守刺繍とは、江戸時代から伝わる背中に（縫い）目を作ることで「魔物」から子どもの命を守るための「おまじない」。不安の時代を生きる現代においても、刺繍を通して安心を感じる。

背守刺繍とは... 背中を守る

- 医学の知識や技術が乏しかった頃、生まれたばかりの命は失われやすく、人びとはさまざまな形で祈りの「しるし」を産着や祝い着に付けた。産着は単なる体を守る衣類ではなく、むきだしの魂を守る「キモノ」だったのだ。
- 魔物は背中から忍び寄る。あるいは、魂は背中から抜けやすい。人々はそんなふう考えた。そしてキモノには背に一本の縫い目があり、その背中「目」が魔物をにらんで退散させる。そう、目には力がある。
- ところが、幼いこどもの小さなキモノには、背中に縫い目がない！そこで、魔物を睨む目として縫い付けられたのが「背守り」だった。



- 単純な縫い取りや房、小さな布切れを縫い付けただけのもの、華麗な刺繍、押絵になったもの...。豪華な晴れ着あり、質素な普段着あり。「背守り」は時代や地域、人によって、呼び方、その方法や語られる意味など、実に様々だ。しかし、そこには等しく子どもが健やかに育つように願う母の気持ちが込められている。

- 下中菜穂『【背守り】練習帖』エクスプランテ 2010年 pp.8-9



魔を祓う力 生きる力

- 子どもを産み育てる。それは深い喜びであるとともに大きな不安をともなう。子どもが病気になった時、自分にできることといたら、回復を祈るしかない…。医学や科学が発達した今でも、命のもろさ、危うさ、不思議さは、その瀬戸際では、なんら昔と変わらないのかもしれない。
- 縫い目に魔物を睨む力をみた祖先たちの気持ちに寄り添いながら、今では意味が忘れられた風習や行事、模様を読み解いてみよう。そこには彼らがどんなものに「力」があると考えていたのか、人生の生老病死とどう付き合ってきたのかが見えてくる。



- それらを古い迷信と片づけてしまうのは簡単だが、その中には深い自然の観察と、命に対する洞察力が含まれているのではないか。
- 人間のなかの「生命力」を沸き立たせる力。それがどこからやってくるのか。私たちは未だ、それを解明したわけではなかったのだから。
- 下中菜穂『【背守り】練習帖』エクスプランテ 2010年 pp.20-21
- まして、新型コロナ感染症や豪雨などの自然災害が続く昨今の中でお産を控える皆様には、決して古いこととは思えない不安をお持ちなのではないでしょうか。





正保 正恵
前野いずみ 著

おも 想いを伝える 布仕事

背守り刺繍

ユニバーサルファッション

大修館書店

2024年9月に出版しました。
想いを具体的なものに
託し、誰かのために縫
うことが相手も自分も
ウェルビーイングにする、
ということを強調
しています。



WSの様子



感想

- 誰かを想いながら集中できる時間は日常生活にないためと音いと思いました。
- 作業中は無心でありながら自分と向き合う時間でもあり、様々なことを考える時間となりました。
- 作業しながらイメージを膨らませ、淡々と作業していく時間自体が心に充実感をもたらしてくれた。
- このようなおまじないを知らなかったのでぜひ話を聞き体験したかった。

何気ない日常を想起しよう

宮前 良平

(専門：社会心理学)

ワークショップ（WS）の概要

テーマ「何気ない日常を想起しよう」

- ・2024年10月5日(土)実施
- ・所要時間:2時間
- ・募集した参加者:上限10名程度
- ・実際の参加者:4名



開発者であるサトウアヤコさん作成のスライドより

「日常記憶地図」とは

2012年に開発

地図の「よく行った場所」「よく歩いた道」をなぞって描き、過去の「場所の記憶」を思い出す方法です。「場所の記憶」の集合はその人の世界の範囲とみなします。

この方法を使い、土地の「場所の記憶」の展览会や、ワークショップをしています1人でも、インタビューでも使えます。

開発者であるサトウアヤコさん作成のスライドより

日常記憶地図メソッド

0. 思い出したい時期の地図を用意する。

1. 地図に、当時の家の場所、よく行く場所／道を**なぞって描く**。

1. 場所／道それぞれの、よく行った理由や習慣、思い出した記憶を書く（聞く）。

1. 最後に「愛着のある場所」について聞き、当時の生活圏を囲む。



提供: 長野県立美術館

開発者であるサトウアヤコさん作成のスライドより



〈日常記憶地図 長野編 1950s-2020〉

WSでの参加者の姿から

- 小学校のころに住んでいた場所の地図をなぞることで、普段は思い出さない「弱い記憶」が蘇り、現在の自分を形作っている経験に触れることができた。
- お互いに地図を見ながら会話をするので、向き合って話をするいわば「尋問形式」のコミュニケーションにならずに済んだ
- それぞれの参加者のごく私的な記憶にもかかわらず、お互いの記憶が刺激され芽づる式に想起が生まれた。

- とりたてて思い出すことのなかった弱い記憶が地図をたどるといふ身体的な動作によって想起された可能性
- 他者の私的な記憶によって、自らの私的な記憶が喚起される可能性

参加者の感想 (事後アンケート回収数4)

誰かとコミュニケーションをとるときの糸口になると思いました。自分でも普段忘れていたようなことを思い出すと、いもづる式にいろいろな思い出が思い出されて今の自分を知るヒントにもなりました。面白かったです。

今回のようなワークショップは、初めてで、図書館に行き、当時の地図を調べただけで、とてもなつかしかったし、忘れていた出来事、記憶を自分からは思いつかない角度でたどることができました。

小学校のころに感じていたことを振り返れて楽しかったです。

絵でコミュニケーションしよう

山内 加奈子

(専門：臨床心理学)

ワークショップ(WS)の概要

山内

「絵でコミュニケーションしよう」

実施日：2024年10月19日(土)

所要時間：1.5時間

募集定員：10組程度（一人での参加：可）

参加者：7名

準備物：画用紙、色鉛筆、マジック、
クレヨン、クレパス、はさみ、
のり、ワルテック誘発線法用紙



WSのプログラム

※ Rule
人の作品を笑わない
得られた情報は口外しない

山内

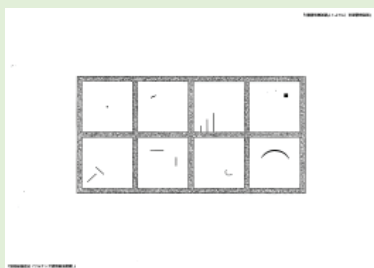
1. 誘発線描画法（1人で実施）

- 1) 誘発線に対して、本人が自由に描き足して完成させる
- 2) 1)を切り取る
- 3) 1枚の画用紙に2)を貼る
- 4) 3)を再構成させるために、必要な部分を書き足して完成させる

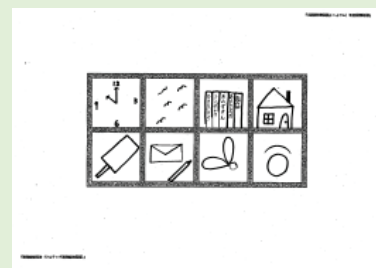
2. 描画連想法（2人1組で実施：以下、①さん、②さん）

- 1) 1枚の紙に対して、①が目をつむって「グルグル」描く
- 2) ②は、1)を使って何かを完成させる
- 3) ①は②に対して「何を描いたのか」等、気になる点を尋ねる
- 4) ②は新しい紙に絵を描く
- 5) 4)と3)を繰り返す

誘発線描画法 実施要領



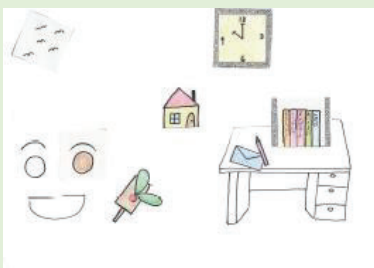
1. 図版



2. 1の図版を使って
絵を完成させる



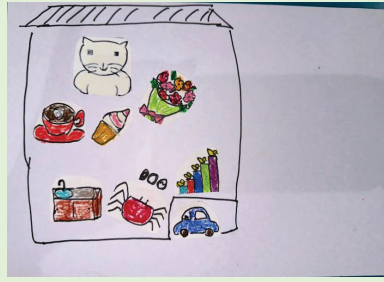
5. 4に対して、1
枚の絵を完成させる



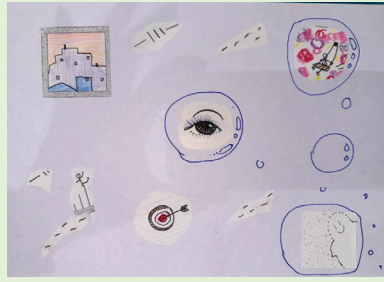
4. 3を切って、1
つの用紙に再配置



3. 2に色を付ける



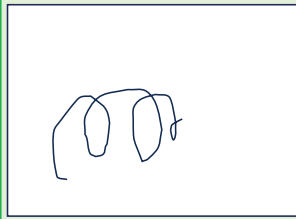
完成した画



最初は同じ図版を使用しているが、全く異なる画が完成した。
何を表現したのかを各々紹介しあった。

描画連想法 実施要領

①さん、②さん



1. ①目をつむってグルグル描く



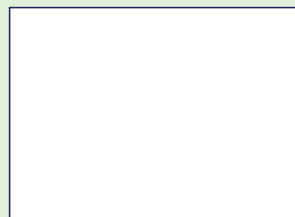
2. ②は、1を使って絵を完成させる



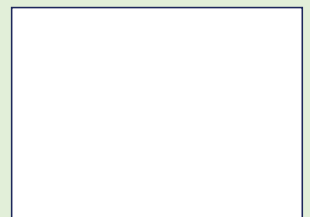
3. ①は②に対して何を書いたのか尋ねる

7. 2人で全ての絵を眺めて何が展開されているのか共有する

6. 4と5を繰り返す(10分程度)



5. ①は②に対して何を書いたのか尋ねる



4. ②は、新たな絵を描く

WSに参加しての感想

違う視点で同じものを見て感じることで、新たな気づき生まれるところが面白かったです。

絵で表現したり、コミュニケーション、また受講したいです。

無意識が表現されるというか、なかなかない機会でもだまだ取り組みたかったくらいです。

意図しない図から、おもいついたことを描く、そこから生まれるストーリーの偶然性は、自分の意識外のものがあらわれていて、不思議な体験でした。

1人でなく2人で振り返ったことも気づきがあり良かった。

他者の視点を知ることによって自分が感じていた世界に広がりが出る。



絵でコミュニケーションする意味とは？

絵は、絵心や美的センスがないと描けないと思っている人が少なくない。しかし、本セッションは「絵」の上手/下手を問うものではない。大人になって、誰かに見守られながら絵を描くという体験は非日常的である。

最初は筆が進まなかった人も、少しずつ解放されて自由に絵を描くことができるようになってくる。また、一般的に絵画は自分ひとりで完結する作業であるが、自分の描いた絵に対して、質問を受けると、自分が意図していなかったことに気づきを得ることもある。さらに、その質問が次の絵に影響を与えることもある。

絵を一枚一枚丁寧に描くことに没頭するが、終了後、全ての絵を眺めてシリーズとして見た際に、何が見えてくるのかを問うと興味深い。人によっては何かが「象徴」として表出され、主体にとって構造論的に描画を捉えることができることもある。その中で、自身の課題や人生のテーマが浮かび上がってくることもある。

言葉では表現できないものをアートを通して具体的に表現することは、主体の中に抑圧されていたものが解放されるとも考えられ、結果としてカタルシスを得ることもあると考えられる。

みんなで楽しむ造形遊び

渋谷 清
(専門：美術教育)

ワークショップ (WS) の概要

渋谷

「みんなで楽しむ造形遊び」

- ・ 2024年10月19日(土)実施
- ・ 活動場所：福山市立大学小松安弘記念館
- ・ 活動時間：2時間
- ・ 募集した参加者：10組程度(一人でも可)
- ・ 実際の参加者：12名
- ・ 準備物：幹・枝用の布シート、色画用紙
ハサミ、のり、テープ、クレヨン



造形遊びのワークショップ～みんなで大きな木をつくる～

活動の内容は、2024年5月にふくやま美術館で実施した「イタリアと日本の前衛」出展作家・ブルーノ・ムナーリの絵本『木をかこう』(1978)に関連した子ども造形教室WSをベースとした。



WS～当日の活動内容～

1. 幼児造形教育の目的と特徴

- ・ 幼稚園教育要領、保育所保育指針等の改訂より「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」が示された。
 (10) 豊かな感性と表現
 心を動かす出来事などに触れ、感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲を持つようになる。
- ・ 変わりつつある幼児造形教育の特徴について理解を深めた。

2. 造形遊びについて

- ・ 事前に置いた3本の幹から枝をのぼそう！
- ・ 先に行くほどだんだん細くなるよ！
- ・ いろいろな方向にのぼそう！重なってもいいよ。
- ・ 枝がひろがったら、葉っぱを置いていこう！
- ・ 虫や生きものを描いたり、つくったりして住ませてみよう！
- ・ 出来上がったおおきな木と記念撮影！「あとかたづけ」までしっかりね。

○ 「遊び」の方法は最小限に
 ○ みんなで力を合わせてつくる

WS～当日の活動内容～



渋谷

参加者の感想から

30代	体を動かしながら造形ができて楽しかった。
50代	大勢の人達と共同で作業を楽しむことができました。
40代	造形遊びをみんなでできてとてもたのしかったです。先生のお話も勉強になりました。ありがとうございました。
60代	造形あそびの大切さや作品を残さないという事を知れました。木の作り方が知れて良かったです。
40代	とても興味深く、楽しい講座でした。参加された方々と、1つのテーマで形にしていくこと、幼い娘も夢中で参加していたのが良かったです。床にある木の枝を、楽しそうにピョンピョンとんでいて、表現するのも、形にする過程も楽しく取り組みました。
40代	自分1人では作れない巨大な樹を、協力して作るのはとてもワクワクする体験でした。子供だけでなく、大人も夢中になれました。そして、できた作品がとても良かったです。

本研究の目的1. 「アートを通じた安心・安全を感じる学びをプログラム化し、個人や社会にもたらす変化を評価していく足がかりを作ること」に照らして

- 参加者の感想からは、「**個人の内省**」, 「**アイデンティティ**」, 「**主観的幸福感**」などの項目について**プラスの評価**がなされた。
- 今回は、対象を妊婦とそのパートナー, 子育て中の親（と子）から一般の方々に対象を広げたため, **アートやケアに関心を持つ方も参加**いただけた。
- 逆に, 対象とした方々の参加は難しかった。

2. (メタ的な目的) 「新しいタイプの大学発の子育て・親育て拠点の在り方を問う」に照らして

- 連続講座を通して、それぞれがアートとケアについて**想いを伝えあいながら、共有しながら仲間意識と目的意識が生まれ**シェアできた。
- 最後の「振り返って」の時間に、様々な視点を共有しながら、研究会に発展させ、それぞれが妊娠中や子育てカップル、あるいは一般市民の皆さんに向け「アートとケア」をつなぐ「得意」を伝えたいということになり、**大学教員が中心となりながらも市民もサポーター側に立つという研究会を作っていく**運びになった。
- 参加者を中心に、「HACD研究会」（**ひとつつながりアート&ケアにであう**）を設立することとし、「参加者が学びあうしくみ」= 新しいタイプの大学発子育て・親育ての拠点を模索する。

成果と今後の課題

本実践の下敷きには、Geoffrey Crossick, Patrycja Kaszynska (2022)がある。大学に市井の人々が集まり、議論や一緒に楽しむ機会を上手に作っている場所はまだ多くはないだろう。大学と地域の行政が連携した異分野グループによる本実践は、The AHRC Cultural Value Project の研究成果に基づく「個人の内省」、「アイデンティティ」、「主観的幸福感」などの効果を見出した。地域の子育て家族支援をめざした本実践から、副次的な成果も見られ、真の学びを生み出す大きな意味が見出された。今後もアートとケアが会う、大学発のアートの場をさらに展開させていきたい。

引用文献・謝辞・付記

Geoffrey Crossick, Patrycja Kaszynska (2022) 『芸術文化の価値とは何か—個人や社会にもたらす変化とその評価』水曜社
東京藝術大学 Diversity on the Arts プロジェクト, 坂口恭平他(2022) 『ケアとアートの教室』左右社

謝辞

本研究を進めるにあたり、ネウボラ推進課、WSにご参加いただいたみなさまに心よりお礼申し上げます

2025年度はこの成果を踏まえて
ワークショップ

「アートとケアをつなぐ視点とその広がり」
を実施し、さらに研究も深めてまいります。